

昔むかし、ある国に、王さまがいて、絵にも描けないほど美しいお姫さまが三人ありました。王さまは、お姫さまたちを、自分の瞳ひとみよりも大切にしていました。王さまは、地下に御殿ごてんを作って、お姫さまたちをかくしてしまいました。お姫さまたちは、冷たい風にあたらなくてすみましたが、美しい太陽の光に照らされることもありませんでした。

あるとき、お姫さまたちは、本を読んでいて、御殿の外に明るいすばらしい世界があることを知りました。そこで、王さまが地下の御殿おとすを訪れたとき、お姫さまたちはいいました。

「お父さま、どうか、わたしたちをここから出して、明るい世界を見せてください。緑の庭を歩かせてください」

王さまは、思いとどまらせようとしたが、お姫さまたちは聞き入れませんでした。お姫さまたちがしつこくねだったので、とうとう、王さまは根負けこんまして、願いをかなえてやることにしました。

こうして、世にも美しいお姫さまたちは、庭へ散歩に出て行きました。

お姫さまたちは、太陽や、木や花をながめて、明るい世界で思いのまま遊べるのがうれしくてたまりませんでした。庭をかけたまわり、ふざけたり、あの草この草に見とれたりしていました。すると、不意ふいに、はげしいつむじ風が巻き起まりました。つむじ風は、お姫さまたちを空高く巻き上げたかと思うと、はるか遠くへさらってしまいました。王さまは、すぐに、家来けらいたちに、「娘たちの行方をつきとめた者には、ばくだいなほうびをあたえる」と約束やくそくして、あちこちへつかわしました。けれども、家来たちは、何ひとつ手掛てがかりを得られずに手ぶらで帰って来ました。

そこで、王さまは、貴族きぞくたちを集めて、「娘たちをさがし出した者には、娘のひとりつまとしてあたえ、一生こまらないだけの財産ざいさんをあたえる」と約束しました。けれども、だれひとり、さがしに行こうという者はいませんでした。王さまは、

「わしには、ひとりの友も味方みかたもないとみえる」といって泣なきました。

そして、こんどは、国じゅうにおふれを出して、

「お姫さまたちを見つけた者には、お姫さまを妻としてあたえ、この国をあたえる」

と告げました。

そのころ、ある村に、貧しい母親と、三人の息子が暮らしていました。息子たちは、力じまんの勇士でした。三人とも同じ日に生まれ、一番上の息子は夕方に生まれたので、夕べと名づけられました。二番目は真夜中に生まれたので、夜ふけ、末っ子は、朝早く生まれたので、あかつきという名でした。

三人は、王さまのおふれを聞くと、さっそく、旅のしたくをして、都へ上りました。そして、王さまの前に出て、ていねいにおじぎをしました。

「どうか、お姫さまたちをさがしに出かけることをお許してください」

王さまは、

「それはよく来てくれた。名前は何というのか」といいました。

「わたしたちは血を分けた兄弟で、あかつき、夕べ、夜ふけと申します」

「旅に出るのに何をつかわそうか」

「なにもいりません。ただ、わたしたちには、年とった貧しい母親がおります。そのめんどろを見ていただきたいのです」

王さまは、兄弟たちの母親をお城に引きとって大切に世話させました。

兄弟は旅に出ました。ひと月、ふた月、三月と馬を進めました。やがて、広々とした荒野にさしかかりました。その荒野をこえると、深い森があり、森のはずれに一軒の百姓家が立っていました。窓をたたいても返事がないので、入って行くと、家の中にはだれもいませんでした。

「じゃあ、しばらくここに泊まって、旅の疲れを休めることにしよう」

三人は、そういって、横になって寝ました。

あくる朝、あかつきが、上の兄さんの夕べに、

「ぼくと夜ふけはふたりで狩りに出るから、兄さんはうちに残って食事のしたくをしておくれ」といって、夜ふけといっしょに出かけて行きました。

ひとり残った夕べは、家畜小屋に行つて、いっぱいいるひつじの中から、とびきり上等な雄ひつじを選び出すと、殺して皮をはぎ、かまどであぶり始めました。それから、ベンチに横になって休んでいました。

とつぜん、どんとどんと戸をたたく音と、ごろごろと雷の鳴るような音がして、入り口の

戸がぱつとあきました。入ってきたのは、背丈が指の爪くらいでひげが六十センチもある年とった小人でした。小人は、夕べをはったとにらみつけてどなりました。

「どうして、わしの家に入りこんで、主人面づらをしてるんだ。よくもわしのひつじを殺したな」

夕べは答えました。

「まず大きくなるんだな。さもないと、地面と見分けがつかないや。ここにあるキャベツのスープひとさじと、パンの切れはしを、おまえさんの頭からふりかけてやろう」

小人は、ますますいきり立ちました。

「わしは、小さくたって強いんだぞ」というが早いか、パンの硬い皮をつかんで、夕べの頭をごつんごつんと打ち始めました。そして、夕べが息も絶え絶えになるまでたたきのめして、ベンチの下へころがしました。それから、焼いてあったひつじをぺろりとたいらげて、森の中にすがたをけしました。夕べは、ぼろきれで頭をつつみ、うんうんうなりながら横になっていました。

そこへ、あかつきたちが帰って来ました。

「どうしたんだい、兄さん」

夕べは、

「かまどに火をつけたら、あんまり暑くなりすぎて、頭が割れるように痛くなったのさ。一日じゅう寝ていて、食事を作るどころじゃなかったよ」と答えました。

つぎの日は、あかつきと夕べが狩りに出て、夜ふけが、うちに残って食事のしたくをすることになりました。

夜ふけは、いちばん太った雄ひつじを選んで殺し、かまどであぶりました。それから、ベンチに横になって休みました。

とつぜん、どんどんと戸をたたく音と、ごろごろと雷の鳴るような音がして、背丈が指の爪くらい、ひげが六十センチもある年とった小人が入ってきました。そして、夜ふけをさんざんたたきのめして、半殺しの目にあわせると、焼いてあったひつじをぺろりとたいらげて、森の中にすがたを消しました。夜ふけは、ハンカチで頭を包み、うんうんうなりながら横になっていました。

そこへ、あかつきたちが帰って来ました。

「どうしたんだい、兄さん」

夜ふけは、

「炭火の毒にあてられたんだ。頭ががん痛んで、食事を作るどころじゃなかったよ」と答えました。

三日目は、兄さんたちが狩りに出て、あかつきがうちに残り残りました。そして、一番上等の雄ひつじを選んで殺し、皮をはいで、かまどであぶりました。それから、ベンチに横になつて休みました。

とつぜん、どんとどんと戸をたたく音と、ごろごろと雷の鳴るような音がして、背丈が指の爪くらい、ひげが六十センチの年とった小人が入ってきました。小人は、あかつきに飛びかかり、力いっぱい頭をなぐりつけました。あかつきは、がばと跳ね起き、小人の長いひげをつかむなり、前後左右に引きずり回していいいました。

「浅瀬も知らずに、川を渡るな」

小人は、

「かんべんしてくれ、剛力無双の勇士よ。罪ほろぼしができるよう、命だけは助けてくれ」とさげびました。

あかつきは、小人を中庭に引きずり出しました。そして、小人のひげを、鉄のくさびで櫛の木のかいりに打ち付けてしまいました。それから、家に入って、兄さんたちが帰ってくるのを待っていました。

兄さんたちは、狩りから帰ってくると、あかつきが、かすり傷ひとつ負っていないのを見てびっくりしました。あかつきは、にやにや笑いながらいいました。

「兄さんたちの頭痛の種を見つけたよ。くいにつなぎとめておいたから、見に行こう」ところが、中庭に行つて見ると、小人は逃げ去ってしまっていて、ひげが半分、くいにからみついてゆれていました。地面には、血が点々と落ちていました。三人は、血の跡をたどつていきました。

やがて、深い穴のふちに着きました。あかつきは、森の菩提樹の木の皮で縄を作りしました。その縄を腰に結び付けると、兄さんたちに、自分を穴につるしてくれるようにいいました。あかつきは、穴の中を降りて行きました。

穴の底に着くと、あかつきは、縄をほどいて、足まかせに歩き出しました。ずんずん歩

いて行くと、銅の御殿が立っていました。その国は、何もかもが銅でできていました。御殿の中に入って行くと、ほおが花よりも赤く、肌が雪よりも白い、王さまの末のお姫さまが出迎えて、やさしい声でたずねました。

「どうしてこんなところに来たのです、りっぱな勇士さん。自分から進んできたのですか、それとも道に迷ったのですか」

「王さまのいいつけで、あなたがたをさがしに来たのです」

お姫さまは、あかつきを食卓に座らせて、ごちそうをふるまうたうえ、力水の入ったガラスびんをわたしていました。

「この水をお飲みなさい。うんと力がつきますよ」

あかつきは、ガラスびんの中身を飲みほしました。すると、体の中に力がわいてくるのを感じて、(もうだれにだって負けるものか) と思いました。

そのとき、はげしい風がふき出しました。お姫さまは、顔色を変えて、

「もうすぐ、うちのへびが帰って来ます」といいました。お姫さまは、あかつきの手を取って、隣の部屋にかくしました。そこへ、首が三つあるへびが飛びこんできて、しめった大地に身を打ち付けると、りっぱな若者のすがたになって、さげびました。

「おや、ロシア人の匂いがするぞ。だれか客が来ているのか」

「ここへ来るお客なんてあるものですか。あなたは、ロシアじゅうを飛び回ってきたので、匂いが体にしみこんでいるんですよ」

お姫さまはそういって、へびのために食べ物や飲み物を運んで来ました。

へびは、たらふく食べたり飲んだりしたあと、お姫さまのひざに頭をのせて、しらみを取ってもらっているうちに、ぐっすり眠ってしまいました。お姫さまは、そっと、あかつきを呼びました。あかつきは、刀をふり上げて、へびの首を切り落としました。そして、たき火をおこしてへびの体を焼き、その灰を広い野原にまき散らしました。

あかつきは、

「お姫さま、さようなら。これからあなたのお姉さまたちを探しに行きます。見つかりしだい、もどってきますから」といって、出かけて行きました。

ずんずん歩いて行くと、銀の御殿が見えてきました。その国は何もかもが銀でできていました。御殿の中に入って行くと、王さまの二番目のお姫さまが、あかつきを出迎えました。

た。

「どうしてこんなところに来たのです、りっぱな勇士さん。自分から進んできたのですか、それとも道に迷ったのですか」

「王さまのいいつけで、あなたがたをさがしに来たのです」

お姫さまは、あかつきを食卓に座らせて、力水の入ったガラスびんをわたしていいました。

「この水をお飲みなさい。うんと力がつきますよ」

あかつきは、ガラスびんの中身を飲みほしました。

そのとき、はげしい風がふき出しました。お姫さまは、顔色を変えて、

「もうすぐ、うちのへびが帰って来ます」といいました。お姫さまは、あかつきを、隣の部屋にかくしました。そこへ、首が六つあるへびが飛びこんできて、しめった大地に身を打ち付けると、りっぱな若者のすがたになって、さげびました。

「おや、ロシア人の匂いがするぞ。だれか客が来ているのか」

「ここへ来るお客なんてあるのですか。あなたは、ロシアじゅうを飛び回ってきたので、匂いが体にしみこんでいるんですよ」と、お姫さまはいいました。

へびは、たらふく食べたり飲んだりしたあと、お姫さまのひざに頭をのせて、しらみを取ってもらっているうちに、ぐっすり眠ってしまいました。お姫さまは、そっと、あかつきを呼びました。あかつきは、刀をふり上げて、へびの首を切り落としました。そして、へびの体を焼き、灰を広い野原にまき散らしました。

あかつきは、

「お姫さま、さようなら。これからあなたのお姉さまを探しに行きます。見つかりたい、もどつてきますから」といって、出かけて行きました。

どれほど旅をつづけたことか。やがて、あかつきは、金の御殿に着きました。その国は何もかもが金でできていました。御殿には、王さまの一番上のお姫さまがいました。

「どうしてこんなところに来たのです、りっぱな勇士さん。自分から進んできたのですか、それとも道に迷ったのですか」

「王さまのいいつけで、あなたがたをさがしに来たのです」

お姫さまは、あかつきを食卓に座らせて、力水の入ったガラスびんをわたしていいまし

た。

「この水をお飲みなさい。うんと力がつきますよ」

あかつきは、ガラスびんの中身を飲みほしました。

そのとき、はげしい風がふき出しました。

「もうすぐ、うちのへびが帰って来ます」

お姫さまは、あかつきを、隣の部屋にかくしました。そこへ、首が十二あるへびが飛びこんできて、しめった大地に身を打ち付けると、りっぱな若者のすがたになって、さげびました。

「おや、ロシア人の匂いをするぞ。だれか客が来ているのか」

「ここへ来るお客なんてあるのですか。あなたは、ロシアじゅうを飛び回ってきたので、匂いが体にしみこんでいるんですよ」と、お姫さまはいいました。

へびは、たらふく食べたり飲んだりしたあと、お姫さまのひざに頭をのせて、しらみを取ってもらっているうちに、ぐっすり眠ってしまいました。お姫さまは、そっと、あかつきを呼びました。あかつきは、刀をふり上げて、へびの首を切り落としました。そして、へびの体を焼き、灰を広い野原にまき散らしました。

お姫さまは、中庭に出て、赤いハンカチを取り出してひと振りふりました。すると、金の国がそっくり小さな卵の中に収まってしまいました。お姫さまはその卵をひろって、ポケットにしまいました。あかつきは、お姫さまといっしょに、銀の国に向かいました。

銀の国のお姫さまは、お姉さんに会って大喜びしました。そして、赤いハンカチをふって卵の中に銀の国を収めると、ふたりといっしょに銅の国に向かいました。

末のお姫さまも、お姉さんたちに会って大喜びしました。そして、赤いハンカチをふって、銅の国を卵の中に収めました。

あかつきと三人のお姫さまは、あかつきが降りて来た穴の底までもどって来ました。あかつきが合図をすると、夕べと夜ふけが縄をおろして、みんなをつぎつぎに引き上げました。そして、みんなそろって、王さまの国にもどりました。

お姫さまたちが、広い野原で卵を転がすと、たちまち、銅の国、銀の国、金の国があらわれました。

王さまの喜びようは、口ではいえないほどでした。

あかつきと、夕べと夜ふけは、お姫さまたちと結婚けっこんしました。王さまがなくなると、あかつきが、王さまのあとをつぎました。  
おしまい

村上郁再話

資料『ロシアの民話上』中村喜和／岩波文庫